

新しい短歌地図へ 奥田亡羊

砂子屋書房のインターネットコラム「夢からうろこ」に八月一日付で高良真実氏が「短歌で遭難しないために」という文章を発表した。私が「歌壇」二〇二二年一月号に寄稿した「短歌地図が違う」という歌壇批評への反論である。

「短歌地図が違う」について簡単に説明すると、この文章は学生短歌会に所属し、評論も積極的に手掛ける気鋭の若手歌人の発言に疑問を呈したものだ。その人は口語短歌について語りつつ、岡井隆はまだ読んでいないという。また「奥田さんの世代はニューウェーブの陰に隠れてあまり読まれていないのではないんじゃないですか？」という。私の世代といえば吉川宏志、梅内美華子、大口玲子、横山未来子、松村正直、江戸雪、高島裕、大松達知、島田幸典、松本典子といった昭和四十年代生まれの歌人たち。まさに多士済々、あまり読まれていない世代と括れるのかどうか。そんな首をかしげるような発言に触れ、私が持っている短歌地図と、若い世代が持っている短歌地図が違うのではないかと指摘した。その「若手歌人」というのが高良真実氏だった。

高良氏のコラムは、時をかけて岡井、大口、横山など読み込んだ上での改めての投げかけとなっている。断っておくが、これは同コラムへの直接の返答ではなく、「歌壇」拙論への補足である。私が「短歌地図が違う」で岡井隆の名前をあげたのは、口語短

歌を論じるなら、やはり岡井隆は読んでおいた方がいいと思うからだ。昭和四十年代生まれの歌人の名前をあげたのは、バブル崩壊後、日本社会の変容とともに新しい表現を開拓した世代であるからだ。たとえば大口玲子と吉川宏志は、原発訴訟の原告になったり、沖縄基地問題のデモに参加したり、行動する歌人たちである。現代短歌の一つの動きとして押さえておくべきだろう。

短歌地図が違うなら、世代を超えて情報交換をすれば、新しい短歌地図が描ける。そう前向きに書けばよかったのだが、私も乱暴なものいいをしてしまった。

さて、問題を整理するために二つの問いを設けてみよう。知の強要は許されるのか？知っていることが偉いのか？

高良氏のモヤモヤもこのへんにあるのではないか。居丈高に誰その歌ぐらい常識として読んでおくと強要する人があれば、誰だつて反発を感じるだろう。そして確かに知識は権威と結びつきやすいものだ。だが、この本質は権威主義にはない。

いつだったか森本平氏が「八代集を読まずに歌人を名乗る人を認めない」と発言したのを鮮明に記憶している。かくいう私も古今集と新古今集しか読んでいないが、この発言の意味するところはよくわかる。短歌に限らず、源氏物語、能、茶の湯、歌舞伎、落語、さらに言えば吉本新喜劇に到るまで、先行作品や型、決まりごとに関する知識が受容の前提となる。知っているかどうか、それが日本文化の核心に深々たるものだ。短歌を選んだ時点で、私たちは逃れ難く文化共同体に取り込まれていく。その上でなお、知らないと聞き直れるかどうか。高良さん、どうだろう。すべてを知っている人はいない。無辺際の際の海を、抜き手をきって渡っていくしかないと思おう。